「だ…れ…にい…ざ…ん？…」
「喋るな」

堀川は素早く殉の身体を調べた。

「肋骨が左二本、右一本折れてる。右手は挫傷と複雑骨折。内臓破裂はないようだ」

右膝の裏から手を差し入れて軽く持ち上げ、ふくらはぎを撫でたあと太股の脇を下から上へ圧してゆく。
それが済むと左足へ。殉が醜く腫れた顔を歪める。

「ぐぅ」
「歩くのは無理だな」

横抱きに持ち上げ、道端の平らな草むらまで運ぶと彼はそっと殉の身体を横たえた。

「このまま担いでいって病院に放り込んでやろうか。お前は命を縮めている、確実に」

膝をついた堀川は、片方だけ残った目で弟を見下ろしていた。

「まだやるのか」
「…」
「あの娘がそんなに大事か」
「…」

腫れ上がったまぶたの隙間から、殉も見えぬ目で兄を見上げた。
数瞬の間。視線がぶつかり、押し合う。

すっと立ち上がった堀川が背を向けた。

「好きにしろ」

それだけ言い、ゆっくりと歩き出す。

暫くすれば人が来る
それまで寝ていろ

遠ざかる声が告げた。
顔もあげられぬまま、殉は目を閉じた。

「（生きていて欲しい…少しでも長く…）」

『声』は、ただそれだけを繰り返し、やがて途絶えた。
腫れて熱をもった頬が濡れるのを感じながら、殉は意識を失った。

◇

…

……

……ぃ……

……ぉ…い……

……おいっ……

「オイッ！　しっかりしろ、オイッ！！」

乱暴に身体を揺さぶられ、殉はようやく目覚めた。

「北山…さん？…どうして…」
「そりゃこっちのセリフだ、何があった？　鴉は、お前の兄貴は何処いった！？」
「にい…さん、が？」
「野郎どうやったんだか、俺の携帯に電話してきやがった。ここにいるってな」
「そう…ですか」
「そこにのびてる奴らは何だ？　お前がやったのか？　あのじゃじゃ馬、じゃねぇ加夏子って娘はどうした？　それにお前のそのざまは」
「…カナ…大変だ、カナを捜して！　さらわれたんだ、追いかけなきゃ！」
「動くな。訳わからんが、とにかく応援がいる。ちょっと待ってろ」

北山は取り出した携帯電話を素早くプッシュした。

「真山か、俺だ！　今すぐ来い！！」

怒鳴るように言うと電話を切り視線を飛ばした。
堀川の去っていった道の向こうへ。

◇

網やら漁具やらの道具が雑然と放り込まれた小屋の片隅で加夏子はもがいていた。
足を縛るロープの端は柱に結びつけられていた。
両手の自由は利いたが、歩く事の出来ぬ加夏子に自力での脱出は無理であった。
それでも何とかロープを解こうと、叩いたり引っ張ったり、挙げ句噛みついたりもしてみた。
が、船舶用の頑丈なロープはびくともしない。

辺りを見回してみる。
何か役に立ちそうなものはないかと探してみたが、さすがにそんな都合のいいものは無かった。

こんなとき、ドラマや映画だといいカンジに刃物とかライターとか見つかるんだけど
駄目だよね、やっぱり
殉、大丈夫かな

気掛かりなのは、男二人に殴られていた殉の事ばかりではなかった。

アイツら、何で私をさらったりしたのかな
人質とか言ってたけど…
私達がいろんな事調べたら困る人がいるってこと？

調べられたら困るひと…
衣笠さん
まさか

私と殉に出来るのなんて、たかが知れてる
じゃあ私は、真山さん達の足止めするために？
そこまでして彼を助けたいっていうの？

彼女の知る衣笠恵美子は、断じてあんな破落戸どもと一緒になって他人を傷つける人間ではなかった。
でも同時に、好きなひとを助けるためにはなりふり構わぬ彼女の気持ちも痛い程判った。

わかるよ、わたしだって…
でも、殉にもしもの事があったら絶対に許さない！

その時、建て付けの悪い引き戸が酷い音を立てて開いた。
窮屈そうに身を屈めた蟹男が、食事の載った盆を持って入ってきた。

「ごはん、もってきた」

ドスドスと足を進めると、加夏子の前にそっと盆を置いた。

「たべないと、おなか、すいちゃうよ」

巨体からは想像も出来ない幼い声で加夏子に言った。

「あなたたち、殉をどうしたの？　ここはどこ？　ワタシをどうしようっていうの？！」
「ぼく、むずかしいこと、わかんない」

蟹男は点のような目を細くした。
どうやらそれが彼の困った表情らしいと判った加夏子は、蟹男を睨むのを止め、少しだけ優しい声を掛けてみた。

「あなた、名前は何ていうの？」
「ぼく、ヨシオ。おねえちゃんはなんてなまえなの？」
「加夏子。カ・ナ・コ」

蟹男が嬉しそうに笑った。

◇

傷ついた殉を真山に任せ北山は尾道の街に飛び出していった。
殉から事情を聞いた瞬間、彼の脳は昇ってきた血で膨れ上がっていたのだ。

こんな子供をいいように痛ぶりやがって…
あげく歩けない女の子をさらうだと！？
クソ外道が！！

自分が加夏子を捜すと言った真山を無視し脱兎のごとく走り出した彼の背を見送りながら、真山は殉をおぶってゆっくりと立ち上がった。

「ああなったら北さんは誰にも止められないからなぁ」
「北山さん、凄く怒ってた」
「何か聞こえたのか？」
「泣き叫ぶような凄まじい『声』が。他に何も聞こえないほど」
「そうか…」

北さんは昔、子供を亡くしているんだ
トレーラーに追突されたとか言ってたよ
奥さんも、その時一緒に、ね

ぽつりと真山が言った。

「子供だの家族だのが絡むといつも人が変わる。どこかで他人事じゃあないんだろう、あの人には」
「真山さん、僕は大丈夫です、北山さんを追い掛けて…カナを助けに行って下さい」

真山が背に回していた手を離した。
不意に滑り落ちた足が地に着くのと、殉が呻いて倒れ込むのは同時だった。

「そんなザマで歩いて帰るつもりか？　出来もしないことを口にするんじゃない」

冷ややかな目で見下ろしながら、厳しい口調で真山が言い放った。

「今は傷の手当てが先だ。加夏子ちゃんは必ず連れ戻す、怪我人は足手まといなだけだ。待てないならそこで寝てるんだな」
「…真山…さん…兄に、似てます…ね…」

苦痛に顔をしかめながら殉が言い返す。

「僕が、アイツに？」

立ち上がろうと殉が下から手を伸ばした。
真山は不用意にその手を握った。

がくっ

膝が折れかかる。
とっさに手首を返し『気』を抜いた真山が驚きで目を見開いた。

「真山さんの真似だけど、これくらいなら…僕だって…」
「…あの旅館の前で。そうか、君は感じることが出来るんだな、こういうものを」
「さっきは殴ってくる相手も見えました、たぶん、僕を押さえつけていた奴の見たものが見えたんです」
「なるほど、そりゃ凄い。だが」

今度は真山がねじるように捻り返すと、殉がうつ伏せに潰れた。

「真似だけじゃ使えぬ技だ、君には素質があるよ。でも生兵法は怪我の元だぞ」

もう一度、殉をおぶり直しながら真山は薄く笑った。

心配するな
北さんの頭は血が昇っている位で丁度、働きが良くなるのさ
信じて、任せろ